

2024年度教育活動等に対する学校評価書

2025年5月9日

不二聖心女子学院中学校・高等学校 校長 蒔苗 博道

I 3年間（2022～2024）の運営課題と評価

- （1）カトリックの霊性に根差し、より人間らしく生きる力を育む
- （2）未来へのビジョンを描き、より良い世界を創る力を養う
- （3）使命感をもって、他者、もの、自然とより深く関わる力を培う

運営課題への学校関係者評価委員の評価

3年間（2022～2024）の運営課題	学校関係者評価委員評価				評価委員の意見
（1）カトリックの霊性に根差し、より人間らしく生きる力を育む	A	A	A	A	○保護者アンケートで、キリスト教の価値観に根差した教育が行われている・奉仕について学ぶ機会がある、という2項目を評価したい。 ○祈ること、人の力を越えたものへの畏敬の念が日常生活に息づき、自然に身につくような環境が整えられている。 ○生徒の発言や行動が取り組みの成果を表していると思います。
（2）未来へのビジョンを描き、より良い世界を創る力を養う	A	A	A	A	○各教科の活動内容の中で、知識の定着ということが繰り返し触れられており、創造性を生み出す土台として重要なことであると考えます。 ○生徒が広い視野をもって、また自分で考えることが出来るよう、日頃から意識を高くしています。 ○生徒の発言や行動が取り組みの成果を表していると思います。
（3）使命感をもって、他者、もの、自然とより深く関わる力を培う	A	A	A	A	○各種アンケートなどから、他者への思いやり・共感をじっくり育てることの難しさを感じました。 ○日頃から、教員が一人ひとりの生徒と丁寧にかかわることからはじまり、他者のことが意識されている。恵まれた自然環境を活かした様々の教育プログラムは不二聖心女子学院ならではの取り組みといえる。 ○生徒の発言や行動が取り組みの成果を表していると思います。

評価基準 A：十分に実践や目標を達成している B：ある程度の実践や目標を達成している
C：あまり実践や目標を達成していない D：全く実践や目標を達成していない

2 重点目標

- (1) 成長過程に応じて、キャリア・プランを主体的に形成し実行する力を養う（Design Your Future プログラムのさらなる推進）
- (2) 多様な連携のうちに協働する力を育み、社会につながるオーセンティックな学びを実践する
- (3) 不二農園 110 周年の恵みに感謝し、キャンパスの自然を創造的に教育活動に生かす

3 重点課題

- (1) 宗教教育：変化に対応した宗教教育実践のための教職員・生徒の育成
- (2) 学習指導：主体的創造的学習の促進－カリキュラムの再検討
- (3) 進路・キャリア教育：Design Your Future プログラムと Foundation、Originality、Vocation との統合
- (4) 国際交流：他国の文化を尊重し、共により良い世界を築こうとする姿勢・能力を育むために、オーセンティックな（本物の）体験を多く経験できるよう、情報・機会を提供する
- (5) 生徒指導：時代の変化に即した生徒指導の実践
- (6) 寄宿舍：寄宿舍生活におけるセルフマネジメント力の育成
- (7) 安全対策：未曾有の災害に備え一人ひとりの防災意識を高める
- (8) 入試：学院の将来構想について検討を開始する
- (9) 広報：募集定員確保を目指した広報活動
- (10) 図書：豊かな心と主体的で多様な学びを支える図書館運営を行う
- (11) 学校保健：セルフメディケーション力の育成

重点課題	取り組み	自己評価		学校関係者評価委員の評価	
		評価	学校としての反省・改善策	評価	意見
(1) 宗教教育	○各行事の要項にはプロフィールの項目を記入し意識づけを行った。 ○祈りの会の準備にあたり担任や副担任へ祭具の準備方法の説明を実施。 ○中1と高3祈りの会の講師は新しい司祭に依頼した。 ○職員宗教研修については5月と8月実施。 ○テレジア会のヘッドは信者生徒ではないが、活動報告の新聞を校内に掲示するなど意欲的に活動している。	A	○全ての学校行事で養いたいプロフィールにある生徒像について、中高担会でも補足していく。 ○宗教の授業カリキュラムとの関連からも他学年の祈りの会の講師も検討を始めている。 ○ミサや宗教行事の係に信者でない多くの生徒に役割の機会を与えるよう配慮するようにしている。	A	○教職員のキリスト教理解のために研修の形などに工夫が見られることが素晴らしいと思います。 ○宗教教育が教育活動の中心にあり、宗教の授業、宗教行事が修道者でない教員のリーダーシップにより工夫されて行われている。 ○他の私立校との違いはカトリックの精神に根付いた教育であることですので、この点は明確に出していただきたいです。
(2) 学習指導	○新しい日課が始まり、カセット授業はまだ慣れないものの、朝礼前・放課後の時間はゆとりが生まれ、安定している。	A	○教員対象に学校行事・カリキュラムについてのアンケートを実施。その結果を用いながら、検討	A	○ゆとりを重視した日課の変更は、意義があることであると思います。 ○生徒自身の主体的、創造的な学びができる

	○教務内規の変更について検討を行い、来年度からの導入を目指している。 ○年間の授業研究テーマにも判断力を養うことを掲げている。デジタル採点は利用者が増加傾向にある。夏の職員研修において個別最適化教育について研修を受けたので、各科での実践を呼び掛けた。 ○BLENDによる成績処理・各種帳票作成は初めてで各学年担任団には負担をかけているが、適切に対応していきたい。		を続けている。 ○BLENDによるワークフローも導入したが、こちらはあまり使い勝手はよくなく、今後、別の方法も検討したい。		よう、様々な工夫と努力が見られる。そのための教員の研修などが行われている。 ○自分の考えて動くことが出来るのは大事なことです。学習指導の成果だと思います。
(3) 進路指導・キャリア教育	○年度のはじめに生徒に Design Your Future プログラムを実施、入力させた。 ○情報提供の充実を図り、キャリアセンターにホワイトボードを設置、また全体の整理も進めた。 ○理系進学ガイダンスを、ズナイデン房子さん（日本マクドナルドの取締役上級執行役員最高マーケティング責任者）を招き、中2～高1の学年全体に拡大して講演実施。 ○上智大や南山大の講演実施。3月の出張講座は東京理科大、多摩美術大学の出前講座実施。 ○マレーシアの新たな大学が指定校に追加。	A	○英数補習や高校補習のあり方を引き続き検討していく。 ○高大連携協定校、高大連携校とのつながりで行われる講演や出張講座などが単年度だけで終わるのではなく継続していくこと努力が必要。	A	○多様化する進路に対応し、理系・美術系の大学との連携を深められているように思います。 ○Design Your Future プログラムによって、生徒の主体的な学習への取り組みが行われている。理系への進学、海外大学進学のための支援体制が積極的に進められている。 ○各大学との連携を図り、生徒たちに大学進学後のイメージを見せてあげられることは大変素晴らしいです。
(4) 国際交流	○Exchange program in Korea(韓国体験学習)事前学習と現地でのプログラムが意義深いものとなった。コロナ後初の姉妹校からの参加者があった。台湾体験学習には積極的に参加。 ○イタリア・アメリカの聖心からの短期交換留学生を受け入れ、Dear Worldの生徒を中心に交流会などを行い、生徒たちの海外への興味関心を引き出した。 ○「国際交流フェア in 裾野」に初参加し、Dear Worldの生徒を中心に活動した。 ○模擬国連の練習会議や AJEMUN、全日会議に中2から高2の幅広い学年生徒が参加した。	A	○海外体験学習、海外留学などについて全校生徒に報告する機会を設け、国際交流について知る機会を設けている。	A	○コロナ以前の状況に戻りつつあることは、教職員のみならずのご努力の賜物です。 ○日頃から世界に目を向けるような教育活動が意識され、海外体験学習、留学生受け入れ、模擬国連の参加など、たいへん充実したプログラムが実施されている。 ○今後益々多様性の社会になりますので、異文化を受け入れる耐性を若いうちから養っているといます。
(5)	○HR だけににとどまらず、全校・中高朝礼を使って、		○SNS の使用方法や危険を回避す		○日々進化する SNS の指導などは、非常に

生徒指導	学校生活の決まりや PC の使い方など、委員の生徒からの呼びかけを行っている。 ○生活向上委員会が中心となり、生徒の声を収集し、校則変更を実施・継続。 ○養護教諭・カウンセラーとの連携を行っている。 ○定期的な生徒アンケートや面談時の傾聴など状況を把握し指導に生かしている。職員研修では、法規といじめについて改めて確認した。 ○SNS 使用について HR や外部講師など繰り返しの指導を継続している。	A	ることについて、保護者会でも家庭での指導を具体的に伝え、協力を仰いでいる。	B	難しい点が多いことと想像します。 ○社会の意識の変化や子どもと子どもをとりまく家族の変化に対応しながら、工夫しなければならないことも多いと思う。教員間の連携、学校と家庭の連携も重要な課題といえる。 ○子供の教育、育て方、社会の常識も昔とは変わってきていますが、聖心らしい清潔さ、謙虚さ、清淑さは必要だと思います。
(6) 寄宿舎	○寄宿舎担当者と学校の学年団の間では生徒指導関係の事も含め連絡を密にできている。 ○特に寝室長については日々の点呼に加えて避難時の避難場所への誘導など、生徒自身で判断できるように働きかけを進めている。 ○生活時間の変更や感染症対策の見直しと合わせて、行事における制限や場所の使い方などについて生徒と話し合いながら見直している。 ○緊急時に備え、点検で不調や不備が確認できたものについては買い替えや修理を依頼した。	B	○学校の校則見直しと合わせて寄宿舎のルール・マナーの見直しも継続していく。 ○特性のある生徒・配慮の必要な生徒については、学校やカウンセラーなどとさらに連携していく必要がある。 ○夜間の宿直業務での安全対策も今後さらに検討していく必要がある。	B	○生活態度、マナー（あいさつ）について、指導の向上をお願いしたい。 ○アンケート結果などから、寄宿舎運営の難しさが読み取れました。 ○年々寄宿舎の人数が増え、また、社会や家庭の状況が変化している中で、学校の運営にもかかわることなので寄宿舎が担う役割が大きい。寄宿舎に関わる先生方のご苦勞も多いのではないかと思います。 ○寄宿生の評判はあちこちで耳にします。全て正しいとは考えていませんが、そのような話が聞こえてくるということは、何かしらあるかなと思います。規律正しく指導をお願いします。
(7) 安全対策	○職員対象に心肺蘇生法の講習（5 月）を実施。全校生徒対象に第 1 回避難訓練（5 月）、総合防災訓練（8 月）を実施。総合防災訓練では、救護訓練を実施し、心肺蘇生法、三角巾法、運搬法を全員が体験した。高校 1 年生対象に防災講話（7 月）を実施。寄宿舎では、5 月に地震避難訓練、10 月に火災避難訓練を実施。 ○裾野西地区の防災教育推進のための連絡会議に参加。 ○新任研修会及び寄宿舎ミーティングで危機管	A	○寄宿舎と学校の合同訓練の実施は、勤務時間帯、生活時間が異なるため難しいが、要項を共有し相互理解に務めている。寄宿の訓練の状況や今後の課題などについて検討していく。	A	○地域との連携の重要性は、ますます高まっているように思います。 ○防災訓練をはじめ、日頃から危機管理についてのマネジメントが行われている。特に、寄宿生を預かっているので気を抜くことが出来ない点である。 ○地域社会とも連携しながらきちんと対策を講じられていると思います。

	理マニュアルの読み合わせを行った。全職員にマニュアルを共有した。				
(8) 入試	○中学入試の募集人数を帰国生、A 日程、S 日程で 66、B 日程で 10 としている。中 3AQ、高 1A0 は募集定員 5 名程度としている。 ○広報の企画する Campus Week (4 月、7 月 8 月) 初夏の野鳥バードウォッチング、Sophie' s Tea Party、個別学校見学などを実施し来校者に対応している。 ○帰国生からの相談の増加にまでは至っていない。 ○中学入試の受験科目や帰国生入試では英語、算数、国語から 2 科目選択を導入。また、A 日程 2 科として、英語、算数、国語からの 2 科目選択を導入。A 日程は上記 2 科と 4 科の選択となる。B 日程で、英語、算数、国語から 1 科目選択を導入。	A	○中学入試の募集要項の検討を継続して行う。 ○学校のことを多くの方に知っていただくとともに、学院が求める生徒像を伝えていく。	B	○入試での面接(保護者とお子様)は無くなったと伺ったが、通知表と試験のみでの合否は従来の学院が求めている生徒とバランスが計れるのか危惧いたします。 ○女子校は全国的に学生募集の厳しさに直面していますが、説明会や試験方式などを常に見直し、工夫して対応されていると感じます。 ○広報活動については、以前にも増して努力され先生方のご負担も大きいのではないかと思います。入試の回数や方法も様々に工夫して努力されていることが分かる。 ○少子化の流れの中、大変だと思いますが、学校が求める、学校が育て上げたい人物像も大事にするような入試のスタイルがあってもいいかも知れません。
(9) 広報	○県内沼津より東のほぼすべての小学校を訪問し、小学生(4~6 年生)全員にイベントチラシを配布。 ○毎月イベントを開催。裾野市民限定のイベント(野鳥の会)も開催。 ○帰国生広報として、SingaLife のオンライン説明会 2 回参加、春・秋号 2 回冊子への掲載。シンガポール・マレーシアの日本人学校・塾を訪問(7 月) ○本校会場で実施の各種イベントに生徒スタッフ参加。PR カウンシルの生徒による SNS 記事を発信。	A	○	A	○県内広報に力を入れた点が評価できます。 ○広報に関わる業務は重要なことなので、学校をあげて様々な取り組みが行われている。同時に、教員の負担も大きいと思われますので、日常の業務とのバランスも課題なのではないかとお察しいたします。 ○聖心あるいは不二聖心女子学院の良さをもっと広範囲にアピールしてもよいのではないのでしょうか。
(10) 図書	○英語科のご協力で、洋書コーナーの全面リニューアルを行った。多数の新刊を購入。配架や POP を工夫し多くの生徒が利用するコーナーとなった。 ○20 周年を迎えた「昨日の新聞から」のコーナーを一新。全てのバックナンバーを閲覧可	A	○生徒の学習や研究活動などにつながる選書や図書館の活動を今後も継続してほしい。	A	○保護者・見学者の来館も多いという点が興味深いです。 ○教員間の連携のもとで、カリキュラムや学校行事に合わせて必要な資料を整えて提供できるような努力をされています。デジタル社会に対応した図書室になっていくことも課題

	にした。 ○保護者、見学者の来館が多いので、学院の魅力をより伝える掲示を意識し行った。（卒業生の活躍、高大連携等） ○夏休みおすすめ本冊子の発行の継続。 ○温情の会委員会と合同で能登復興チャリティ上映会を開催。校外からのお客様も迎えた。 ○SDG s ブックガイド最新版を作成。 ○研究活動における個々の希望に応える選書ができた。 ○「青少年赤十字文庫」を選書申請。 ○県立中央図書館電子サービスについて新規募集と手続き完了。				の一つと言えます。 ○図書室の掲示などとても素晴らしく、私の時代と比べて格段に読書への興味が湧いてきます。
(11) 学校保健	○来室記録を生徒自身で行い、処置後に心身の健康を改善するための保健指導、毎月の保健だよりによる啓発を行った。 ○ケガや病気を事前に防ぐためにはどうしたらよいか、発症した後はどのように対処していけばいいかなどセルフメディケーションの保健指導を行った。 ○気になる生徒(主にメンタルヘルス)は、早期に担任、寄宿、カウンセラーに共有し対応した。 ○大きな感染症蔓延はなかった。BLEND を通して、感染状況の把握に努め、迅速に対応できるようにしたい。	A	○中学1年生への保健指導の場面が多く、引き続き自己管理能力の育成が必要。 ○メンタルヘルスについて保護者とも情報共有し、保護者の方の協力のもとで生徒を支援していきたい。 ○冬に向けて個人の感染対策の呼びかけを行いたい。	A	○個人情報の扱いには気を遣うところではありますが、やはり各部署間の情報共有が重要であろうと想像します。 ○生徒の自己管理能力の育成やけがや病気の防止に努力されているのは、極めて教育的な支援といえる。カウンセリングも大切な役割を果たされている。 ○メンタル不全の生徒も増え、またそれを言い易くなっている所以需要は増えていくと思います。体制の強化は必要だと考えます。